

論文の要旨

論文題目 逆接続助詞の記述的研究
氏名 家田 章子
学位 博士(学術)
授与年月日 平成18年3月23日

第1章では、本論文の概要について述べた。本論文の主な研究目的は以下の2点である。(1) 逆接の条件表現について、従来の説明では十分説明できない用例があることを指摘したうえで、各表現における相違点や類似点を明らかにすること。(2) 電子化資料を用いて共起表現を考察することにより、各表現の特徴や意味・機能について再考すること。

考察の対照とした逆接表現は、「ノニ」「ケド」「テモ」である。また、これらの三つの表現を分析するのに重要と考えた「既定性」「推論の根拠としての強さ」「話し手の感情」を考察するために、共起表現を考察した。具体的には蓋然性のモダリティを中心とした認識のモダリティ表現、取り立て詞(「さえ」「しか」「まで」等)、副詞(「せっかく」「こんなに」等)である。主な実例収集の対象は、『毎日新聞データベース』(1991年-1999年)、『新潮文庫の100冊』、『青空文庫』、放送されたドラマの台詞を文字化したものである。

第2章では、条件文、論理文を分析するのに用いられてきた分析の視点のうち、その主流を占めている既定性(「確定と仮定」「リアリティー」)および論理的な枠組みによる分類を検討した。そして、これの枠組みでは十分に説明できない用例があることを指摘した。その上で、井島(1991)によって提示された「期待」という概念の枠組みの有効性を示した。

第3章では、「ノニ」「ケド」「テモ」の論理的な構造について考察した。まず、これまで逆接表現の分析に使われてきた前節、後節、“p”(推論の根拠)、“q”(推論の結果)、“r”(認識された事態)といった用語の本論文における定義を明確にした。その上で、「期待対照構造」「条件の階層化」を用いて、論理的な構造を示した。

「期待」とは、何かを「期待する」という狭い概念を指すのではなく、予想、思い込み、希望などを総じて呼ぶものである。また、「期待」は現実世界の事態を表すのではなく、言語主体(話し手、聞き手、第三者、社会通念など)の心的世界の内容を表すものであるで、現実世界における既定性とは無関係に存在する。

「対照」とは「何らかの観点で同次元の構文要素同士を比較している表現」のことである。井島(1999b)は「対照」を「対比」「並列」「限定(要素限定)」「添加」「総体(範疇限定)」「多様(=添加)」の六つに分類している。接続助詞の分析に用いているのは、このうちの「対比」と「並列」である。

「期待対照構造」は、「期待世界」「期待」が生じている世界)をどのような世界(現実

世界、期待世界)と対照させているか、また、対照させた要素がどのような関係にあるか(対比、並列)を図示したものである。この「期待対照構造」を改良し、「条件の階層化」という考え方と組み合わせることによって、ノニ文、ケド文、テモ文の表現の基本的な意味機能を明らかにした。

「ノニ」と「ケド」は「“p”(推論の根拠) “q”(推論の結果)」という期待世界を持っているのに対し、現実世界では「“p”(推論の根拠) “r”(認識された事態)」という条件関係を表す。「“p”であるにもかかわらず“q”ではなく“r”である」という“q”と“r”の対比を示す。「ケド」と「ノニ」の違いについては、推論による因果関係があるものが「ノニ」、そのような因果関係がないものが「ケド」と説明されてきた。また、発話意図に関しても、「ノニ」は残念な気持ちや意外感を表すとされてきた。しかし、実際に「ケド」と「ノニ」の語の入れ替えをしてみると、「ケド」と「ノニ」は論理的な構成要素や期待対照構造には違いはなく、“p”(推論の根拠)に「条件としての有効性の程度差」に差異が考えるのが妥当である。「ノニ」は“p”(推論の根拠)が“q”(推論の結果)を導く強い条件であれば文の容認度は高いが、“p”が弱い条件の場合は、文の容認度は下がる。

「テモ」は、一つの“q”(推論の結果)に対して、複数の“p”(推論の根拠)が存在するという条件関係を表す。「“p-1”(推論の根拠) “q”(推論の結果)」という期待世界と「“p-x”(推論の根拠) “q”(推論の結果)」という期待世界が存在し、“p-1”と“p-x”の対比を示す。「テモ」は「ノニ」や「ケド」と異なり、「期待世界」を「現実世界」と対照させるのではなく、別の「期待世界」と対照させる。このため、「テモ」は現実世界とは無関係な仮定の事態についても表すことが可能である。また、テモ文の期待世界は条件の階層化と同様に階層化していることを示した。さらに、テモ文の前節に現れる“p”[=r]は、“q”を引き起こす条件の中で最も強いものが来ると従来言われてきたが、実際にはそうではないことも示した。本論文で「期待世界1」と呼ぶ“q”の条件として最も強いレベルの条件“p-1”を含む期待世界が存在し、その「期待世界1」と相対的に低い“p-x”がテモ節に現れると考えたほうが妥当である。このことは、「無条件」であるとか、「全ての条件を示している」と記述されてきた「疑問詞+ても」にも当てはまることである。

第4章では、既定性を検証するために、認識のモダリティと逆接表現との共起関係を考察した。また、従来の条件表現分類で用いられてきた「既定性」とは何かを再検証し、各表現における既定性とは何かを明示的に示した。

「ノニ」「ケド」「テモ」の使い分けとして従来からひとまとめにして指摘されてきた「既定性」は、その議論の視点から、実現性、疑問詞、仮想(いわゆる仮定)の3つに分けられることを指摘した。

実現性において「既定的でない」というのは、すなわち「実現性が確実とは判断されない未実現の事態」を指す。蓋然性の低いモダリティと共起しないとされてきたのは「ノニ」である。この指摘に関しては、“p”(推論の根拠)と“q”(推論の結果)で実現性の制約が異なることが分かった。各要素を詳細に検討すると、“p”(推論の根拠)に関しては、たと

え“p”自身の実現性が低くても、“p”が“q”を引き起こす条件として十分な強さがあれば、文としての成立を妨げるものではない。その一方で、“q”(推論の結果)に関しては、その実現性が低いと「現実世界」における“r”(認識された事態)との対照が困難になるため、期待世界において実現性の低い要素は来ない。一方、「ケド」や「テモ」にはこのような制約は無い。

疑問詞については、「テモ」とは共起可能であるが、「ノニ」「ケド」とは共起不可能である。その要因となっているものは、疑問詞が持つ不定性によるものではなく“p”(推論の根拠) “q”(推論の結果)という期待世界が複数あることによるものである。このことは、期待対照構造を用いて明示的に説明することが可能である。

仮定についても「テモ」とは共起可能であるが、「ノニ」「ケド」とは共起不可能である。この違いは、期待対照構造において「テモ」は、現実世界と切り離された「期待世界」が複数存在し、その複数の「期待世界」に含まれる要素同士で対照させることができるからである。一方、「ノニ」や「ケド」は「現実世界」と「期待世界」との要素同士を対照させる表現であるため、「現実世界」を考慮に入れない仮の想定を表すことができない。なお、「テモ」がこの意味で「既定的」な内容も表しうることについても、期待対照構造で矛盾無く説明出来る。

第5章では文末に用いられる逆接表現を考察した。「ノニ」が文末に現れる「Aノニ。」という言語形式は、「AノニB。」の複文からBの要素が省略されたものとして分析されてきた。しかし、「Aノニ。」のみで文として完結していると考えられる用例もある。

文末の「ノニ」の本質的な機能は、話し手によってその妥当性を主張された推論(p q)と、何らかの論理的関係を持つと聞き手によって判断された事態(r)との関係から発話意図の解釈を促すことである。

また、推論(p q)と論理的関係を見いだせるような事態(r)が聞き手によって認められない場合は、推論(p q)の妥当性のみを主張する意図として解釈を促す。

第6章では、副詞や取り立て詞と逆接表現の共起関係から“p”(推論の根拠)の“q”(推論の結果)に対する強さについて考察した。条件の階層化の重要性を再確認するとともに、典型的な逆接表現とは言えない用例を分析した。取り立て詞「サエ」を含むノニ文には「テモ」の期待対照構造と同様に期待世界が複数ある。本来期待世界を一つしか持たない「ノニ」にこの取り立て詞が共起した場合に、どのような発話意図を表しうるかを期待対照構造を用いて示した。

第7章では、逆接接続助詞に見られるコロケーションについて考察を行った。具体的には、形容詞を含むコロケーションとして「この~のに」「~ばいいのに」、動詞を含むコロケーションとして「~というのに/ ~といっても」「なんといっても」「~からいっても」「~といってもいい」を取り上げた。

第8章では、本論文での考察を整理し、残された課題について述べた。

